

金武御殿の祭祀と伝承〔1〕
—那覇市首里、王族の系譜を汲む門中の祭祀と伝承の記録化—

萩尾俊章 野村朝生

The rites and tradition of *Chin-udun munchu*〔1〕
- The descriptive works concerning to rites and tradition of *Chin-udun munchu* descended
from the royal family, Shuri, Naha city -

Toshiaki HAGIO, Chousei NOMURA

沖縄県立博物館・美術館，博物館紀要 第12号別刷

2019年3月29日

Reprinted from the
Bulletin of the Museum, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, No.12
March, 2019

金武御殿の祭祀と伝承〔1〕 — 那覇市首里、王族の系譜を汲む門中の祭祀と伝承の記録化 —

萩尾俊章¹⁾ 野村朝生²⁾

The rites and tradition of *Chin-udun munchu*〔1〕

- The descriptive works concerning to rites and tradition of *Chin-udun munchu* descended from the royal family, Shuri, Naha city -

Toshiaki HAGIO, Chousei NOMURA

はじめに

従来の沖縄民俗研究において、主たるフィールドは沖縄の都市部を離れた地方の村落や離島地域であった。都市部においては伝統的な民俗の多くは失われていて、民俗の実態が把握できないとの暗黙裡の前提があったに他ならない。これまでに首里や那覇の民俗を扱った論考は多くほとんどみない。首里・那覇の民俗を対象にした数少ない文献に『那覇市史 那覇の民俗』が挙げられる程度である。⁽¹⁾しかも都市民俗学的なアプローチとなると皆無に近い状態である。

日本民俗学の宮田登は、都市民俗学の可能性として二つの可能性を示した。その一つは都市に対する歴史的なアプローチによるものであり、いま一つは都市の民俗に共時的なアプローチを試みるやり方である。そして、都市民俗学にはこの両者を一体化させる方法論の確立が迫られているとした。⁽²⁾また、都市の中には「人間本来の生き方と結びつく生活が生き生きとしているという<生きられた空間としての都市>の再発見がある」と指摘した。⁽³⁾いわゆる都市民の無意識の世界や隠れた深層部分との関係から都市の民俗研究としての取り組みを提起している。単に地域の都市化を研究するのであれば、人文地理学の範疇域を出ないのであり、民俗的心意の次元にまで踏み込むことが研究視点として期待されているといえよう。⁽⁴⁾

今日、首里や那覇などの都市の基層にも、伝統的な民俗が生きづいていたり、王府時代の伝統文化が継承されていることが推測される。都市空間や社会形態が大きく変容をとげつつある現在、重層的かつ錯綜的な都市を探る試みは、今後ますます重要な作業になると考えられ、都市民俗の実態を掘り下げる試みが必要になるといえる。

このような課題意識に立脚しながら、那覇市首里の金武御殿に焦点をあてつつ、王族の系譜を汲む当該門中の活動や祭祀、それらにまつわる伝承を記録化するのが本稿のねらいである。本稿を記するにあたって、金武御殿の門中に関する様々な資料や写真を提供いただき、祭祀の参与観察にも大きな配慮をいただくとともに、金武御殿の様々な経緯や伝承をお話頂いた野村朝生氏（金武御殿門中会事務局長）には共同執筆者ということで加わっていただいた（以下、敬称は略す）。本文の記述は基本的に萩尾が執筆し、経緯や伝承を含めた事実確認などは野村氏に監修的な役割をお願いした。金武御殿に関する様々な伝承や祭祀に関する写真等の資料を多く提供していただいたが、本稿の紙幅の都合もあることまた追加の聞き取り調査なども加える必要があるため、1回ではすべてを収録できず調査期間も確保すべきことから、本稿は「金武御殿の祭祀と伝承〔1〕」として、今後数回に分けて掲載することとした。

¹⁾ 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1

Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa, 900-0006 Japan

²⁾ 金武御殿門中会事務局長

1 金武御殿について

金武御殿は向姓の中でも古い歴史をもつ門中の一つである。いわゆる系持の分家として「金武」「運天」「普天間」「宇久田」「伊是名」「漢那」などの姓を名乗っているが、これとは別に無系の分家が多くあると言われている。いわゆるナカムートウ（中宗家）としては、普天間・宇久田・伊是名（野村）・漢那・當間・宜野座の金武・長嶺・平安山・新垣・松本などがある。金武御殿の子孫である」と言い伝えられている傍系の子孫が多いことも特徴であるとされる。

門中の構成員は沖縄本島にとどまらず、遠く離島・海外にまで及んでいて、御清明祭やウマチーの祭祀には各地から門中の関係者が多く参集する。総本家の行事に積極的に参加して祖先祭祀を熱心に行う人たちも多く、この傾向は戦後になって強くなったという。⁽⁵⁾

金武御殿は琉球王国時代から立派な御殿屋敷を構えていた。1700年頃の製作と伝わる首里古地図には綾門通りに面していた中城御殿の屋敷に北接して「金武按司」の屋敷が確認できる。当時の区割りでは真和志村の範疇となっているが、屋敷の位置関係からも王家に近い系統として重んじられていたことが類推できる。

首里山川町は首里でも西端に位置し、かつては御殿・殿内屋敷が立地し湧水が豊富な町で、瓦づくりも盛んだったところである。山川の一丁目一帯が屋敷町で、護得久、高嶺、玉城、金武などの各御殿が大きな敷地に豪壮な家を構えていた。一般からするとおそれおおい雰囲気だったという。このほかにも池城、佐渡山、真壁殿内などがあり当蔵・大中町とならぶ屋敷町の景観を呈していた。金武御殿の屋敷には門番もいたというが、大正時代の初め頃、いくつかの土地に分割されて人手に渡ってしまったといい、その後屋敷は首里大中町に移転した。

現在の金武御殿は首里大中町に宗家のウカミヤー（御神家）の祠堂がある。祠堂の建物は南向きに建てられており、門から階段で数段降りたところが屋敷となっている。本来この門は、戦前は裏門にあたるもので、元は建物西側の首里劇場側に正門があった。正門から入るとナカメー（居間）、一番座、二番座、それに三番座まであり、次に台所の間取配置であった。したがって元は門の階段を降りたところ

に台所があった。戦後の再建にあたっては台所を西側に移し、かつての二番座に仏壇とグシندان（御神棚）を設置していることになり、逆転した配置となっており、一般と異なる間取となっている。この祠堂の東側の屋敷は空屋敷となっているが、門中のウクディ（カミンチュ：神人）の屋敷だった場所という。

この祠堂は「仁淵堂（じんえんどう）」と称され、一番座（元の二番座）に相当する座敷に向かって左側に仏壇があり、神位の位牌を安置し、右側に神棚がある。現在の祠堂は戦後の昭和30年代初めに再建されたものである。終戦直後は茅葺の掘立小屋のような建物であったが、台風で壊れたために、寄付を募って新築された。建物の内部には木板に「金武家霊位建立寄附者御芳名」として寄附者の氏名と寄付額が記載され、多くの門中関係者の協力により実現したことがわかる。与那原在の材木店経営の長嶺



写真1 ウカミヤー（御神家）の祠堂

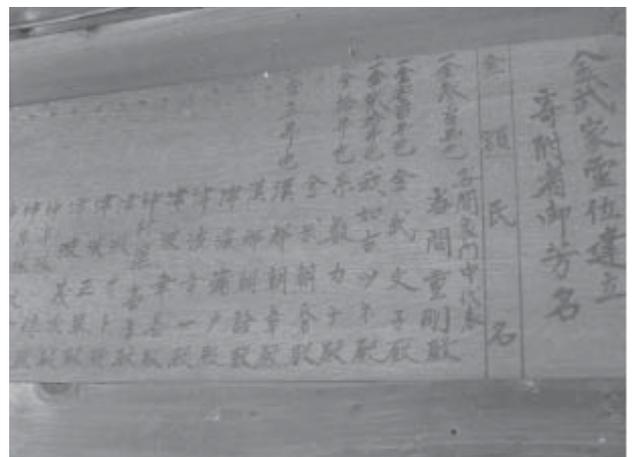


写真2 霊位建立寄附者の一覧

さんが大里や南風原の大工や瓦職人を集め、資材なども出して出来上がったものという。「仁淵堂」の由来については『向姓大宗金武家伝』によると、七世朝洪の項に、1732年8月15日、向氏一門は各祠堂に王廟龍淵堂の淵字を賜って、万水一源の理を現す事になり、仁淵堂の祠号を取る事にしたとある。⁽⁶⁾

また、祠堂の説明板には「尚王家及び御殿殿内の尊室（大宗家 スームートウ）として、古来より中城御殿とともに、御殿の筆頭格として位置づけられており、年中行事の折には全琉はもとより、遠く海外からも参拝者が来集し、香火鼎盛なる尚氏及び尚氏一門の廟宇とされている。その昔、金武御殿の御奉公人や唐大和御使者として旅だった際の御供人数（ウトウムニンジュ）や船頭（シンドー）以下水手（カク）の御子孫方も数百年を経た今に至る迄、当時に受けた恩義志情（うんじしなさき）を忘れず、子孫代々御恩上げのための参拝を欠かさぬ義理堅き方々からも尊崇をあつめ、さらには精神的拠所として、正に守禮之邦の名に恥じぬ祈りの場として、私どもがお守りする数多ある聖地の中でも、第一等の聖地である」と解説されている。

金武御殿は、尚元王の三男・尚久、金武王子朝公を元祖とする琉球王族の系統である。第二尚氏の分家として代々金武間切（現：金武町、宜野座村）の

按司地頭を務めた。二世の五男・朝貞が1624年に金武間切総地頭職となったことを皮切りに、長子三世北谷王子朝秀－四世金武王子朝興－五世朝貫－六世金武王子朝祐と続き、七世朝洪－八世朝聖－九世朝恵－十世朝易－十一世朝英－十二世朝昌と金武按司を称した。⁽⁷⁾このように、金武間切の按司地頭家は代々「金武」と称した。

一世・尚久の四男にあたる尚豊は、尚寧王の後、王位に就いたため、尚久も王の父たるをもって王号を追贈された。二世の尚盛・朝貞（五男）は尚豊王、尚質王の摂政を務めている。さらに、三世の尚慶・朝秀、四世・尚熙・朝興と六世・尚永恭・朝祐は謝恩使に選ばれて江戸上りを行っている。

『琉球国旧記』の「茶」の項目には「天啓七年丁卯、尚氏金武王子朝貞、奉命赴薩州、時得茶種而回来栽之於金武郡漢那邑、遂已徧及于國中焉、茶樹自此而始」⁽⁸⁾とあり、朝貞が薩摩へ赴いた折にお茶の種を得て持ち帰り、金武の漢那で茶樹の栽培を始めたことが記されている。なお、『向姓大宗金武家伝』にも1627年、領朝貞が地漢那において茶の栽培を試みたとある。⁽⁹⁾

ところで現在、金武御殿は「向氏仁淵堂金武御殿門中會」が組織化されている。門中会の規約も定められており、目的として向氏仁淵堂金武御殿門中が

向姓金武家（金武御殿）世系図表

世代	摘 要
一世	尚久・(大) 金武王子朝公
(二世)	尚豊王（尚久四男。王位に就く）
二世	尚盛・金武王子朝貞（尚久五男。金武御殿の家督を継ぐ）
三世	尚慶・北谷王子朝秀
四世	尚熙・金武王子朝興
五世	向弘徳・金武按司朝貫 次男：向弘業宇久田親雲上朝遇（宇久田殿内元祖）
六世	尚永恭・金武王子朝祐
七世	向廷溪・金武按司朝洪
八世	向克寛・金武按司朝聖
九世	向世隆・金武按司朝恵
十世	向維新・金武按司朝易
十一世	向國英・金武按司朝英
十二世	向元楷・金武按司朝昌 次男：向元模・伊是名親方朝宜（伊是名殿内：野村家元祖）三男：向元亮・漢那親雲上朝經（漢那殿内元祖）
十三世	向昌期・金武按司朝穩（後に向昌言に改名）
十四世	向有聞・金武朝芳

平和と相互扶助の精神に則り、社会の向上発展に寄与する為、子弟の教育向上並びに祖先祭祀、伝統行事の継承を図る事を掲げている。そのための活動としては①門中の親睦会を随時行い、門中意識を次世代にも継承させる、②祖先祭祀、伝統行事を積極的に継承し実施する、③その他、本会の目的を達成する為に必要な事業を行う、とある。

また、役員として顧問若干名・会長1名・副会長1名・理事若干名・監事1名、事務局（兼会計）1名が置かれている。理事・監事は総会で選出され、理事から会長と副会長を互選する規約である。

運営費は各会員からの会費で賄われている。世帯（チュチナー）会員、大宗家（スームトゥ）・御殿（ウドゥン）会員、中宗家（ナカムトゥ）・殿内（トゥンチ）会員として各々会費を定めて年会費を徴収しているが、様々な祭事を挙行していく上では会費のみでは厳しい状況と伝え聞いている。

2 金武御殿と位牌（神位）と墓所

金武御殿の祠堂は南面しており、向かって東側の一番座に相当する6畳ほどの座敷に仏壇と神棚がしつらえられている。

向かって左側が仏壇で、右側が神棚である。仏壇には「在如」⁽¹⁰⁾の額が正面に掲げられ、両脇には右手に「千年不墜祖宗業」、左手に「萬古永傳孫子昌」の聯が掛けられている。この聯は年間の祭事によっては別の種類の聯と掛け替えが行われている。

仏壇の位牌は三つある。右端の位牌は尚久王以下九代の位牌で、第二尚氏第八代尚豊王の実家の神位

が祀られている。尚豊王の生父母である尚久王、一鏡妙圓王妃から始まり、尚豊王以降の歴代の先祖が祀られている。中央には三枚の神位（上下に戒名が記される）があるが、これは戦後位牌が戻ってきた際に位牌立てに入れようとしたが、サイズが合わないため、仏壇の中央に位牌札のまま奉納してあるという。位牌札が長いことからコーナー位牌ではないかと語られる。さらに左側の位牌は次三男や子ども、未婚で亡くなった女性など分家筋の位牌となっている。

これらの位牌と同家の家譜については今大戦をは



写真4 神棚の関帝王・弥勒・弁財天（左から）



写真3 一番座の仏壇と神棚

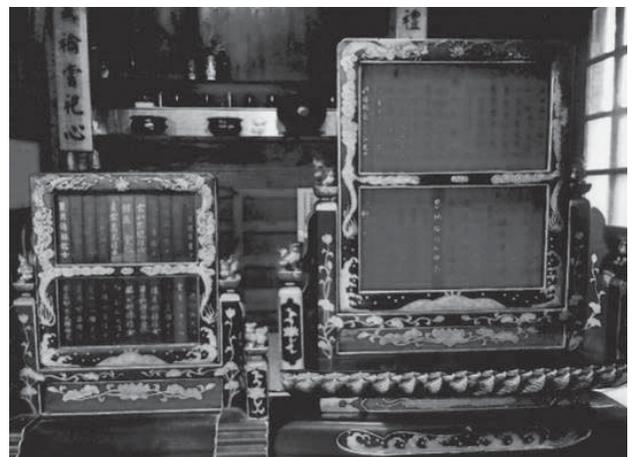


写真5 仏壇の位牌（右が尚久王以下の神位）



写真6 グフンシー（御土地神祠）

さんで以下のような大きな出来事があった。位牌は沖縄戦のさなか、米軍が首里に迫り砲火にさらされるなか、金武家の老女が家譜及び歴代の神主を背負い、家人とともに砲火の下をかいくぐって島尻方面に脱出した。しかし一家は混迷の末に離散し、老女は流弾にあたって倒れ、家譜・位牌は米兵の手にわたり、某海軍大佐がこれを本国に持ち帰ってしまった。

戦後、米国において沖縄系移民の吉里弘が沖縄から流出した『おもろさうし』等の所在を確認し、これらを所有していた某海軍大佐と返還交渉を行った。交渉は難航していたが、沖縄に駐留経験があり、沖縄の文化財の散逸を憂っていたウィリアム・デビス軍曹が協力して、米国政府を動かし、返還が実現することになる。1953年（昭和28）5月26日、尚家所蔵の『おもろさうし』や『王代記』、黄金簪などとともに、金武御殿の家譜や位牌もデビス軍曹が捧持し、米国側からはオグデン少将が立ち会い米国大統領の名のもとに琉球政府主席比嘉秀平に返還された。この日は琉球政府立首里博物館落成式典の当日で、式典に合わせて挙行されたものである。これらの宝物は、比嘉からあらためて尚家代表（最後の国王尚泰の孫にあたる）で、立法院議長でもあった護得久朝章に手渡された後、いったん博物館にて一定期間寄託展覽されたが、現所有者に返還の本旨に基づき、金武家の分はその代表である漢那朝常に戻された。⁽¹¹⁾

こうした経緯を経て家譜と位牌は金武御殿に戻ってきた。家譜については金武御殿の門流である漢那

朝常がつとに宗家の再興に腐心していて、かねてよりその家譜の再編を強く希望していた。原本が米国より戻ってきたことから、歴史研究の大家・東恩納寛惇に依頼があり編纂されたのが「向姓大宗金武家伝」である。⁽¹²⁾

なお、門から屋敷に入ると右手に井戸があり、さらに奥側に小さな祠がある。これは「グフンシー」と呼び、土地神祠である。戦争の時にはその崖面に防空壕を掘り避難にも利用していたが、砲撃が激しくなり別に避難する際、この中にも宝物を隠していた。しかし、これも戦後に屋敷に戻って来ると全てなくなっていて、家譜や位牌とは違って、未だに見つかっていないため大変悔しい思いが語り継がれている。

一方、座敷の神棚には、向かって左側にクワンティヤー（閔帝王）の画像、中央にミルクブーサーガナシ（弥勒菩薩加那志：布袋）の像、右側にビゼーティン（弁財天）の画像を奉祀してあり、その前にはそれぞれに対応した香炉が安置されている。弥勒像の前は、戦後、ユタが勝手に栄町から稲藁製の七福神宝船（正月・飲食店用）を買ってきて飾ったこともあったが、不釣り合いということで廃棄し、現在のもので落ち着いている。



写真7 台所の火の神と聯・御神名の赤札

台所には火の神が祀られている。大（金武御殿本家用）と小（分家用）の香炉が置かれ、壁面には赤い札が4枚貼られている。右から順に①「巍巍聖徳乾坤大」（聯上の句）、②「伍方五帝司命灶君」（火の神の御神名）、③「伍方五帝司命灶君」（火の神の御神名）、④「永永皇圖日月表」（聯下の句）の文字

が書かれている。①・④の聯は火の神をたたえる対句とされる。①・②と③・④が各香炉にセットで祀られる形式である。

野村が久米村の具志堅以徳にこの札を見せたところ久米村のものと同じで驚かれていたという。山里純一が県内の符札については広く調査しており参考になるが、火の神関係の札にこの種の文字は確認できない。⁽¹³⁾

さて、金武家の墓陵は、尚豊王の生母金武大按司志良礼（戒名「一鏡妙圓」夫人）逝去に際して、寛永元年（1624）に造営された拝領墓である。その由来を銘刻した墓碑が墓所の正面脇に建てられており、「本覚山碑」として知られている。碑文によれば、尚豊王は母が逝去するや本覚山に石工を集め、「二夜三日」（表の真字碑・漢文）あるいは「一七日の内」（裏の仮字碑・琉文）に墓を造営したもので、折しも冊封のために来琉していた蕭崇基らが供物を供えて祭文を読み祭ったという。これを記念して三司官が碑文を建立したものである。「本覚山碑」は琉文最後の金石文であり、文献史上でもきわめて貴重な碑文である。この碑文も沖縄戦で墓陵とともに爆破崩壊の災難に遭い、一事は痕跡を辿ることができなかったが、戦後幸いにも断崖の崩土の中から完全な形で発見され、門中の棄捐を集めて再建されたものである。

この墓陵は一般に「西の玉陵」とか「山川の玉陵」とも称されるという。東恩納寛惇の『南島風土記』によれば、「西玉陵」の見出し項目を付けて、「西の玉おどん、又山川の玉おどんと唱へ、山號を本覚山と稱する。金武按司家の拝領墓で、尚豊の生家である故に、その時代から斯く唱へて重視している」とある。⁽¹⁴⁾このことについて、久手堅憲夫は『中山世譜』附卷尚久王の条に、「妃、金武按司志良禮。童名、思戸金。號、一鏡（寵氏上間親方長胤之女。天啓四年甲子、九月二十九日卒。生壽不傳。原葬于向氏金武按司墓。乾隆二十四年己卯、十一月二十一日。移葬于西玉陵。）」と記述があることを提示し、『南島風土記』の見解は金武按司家墓が“西の玉おどん”と呼称されたものであれば、『中山世譜』の記述は同じ墓から同じ墓へ移葬したことになり、自家撞着に陥るとしてこの捉え方を誤りと指摘した。⁽¹⁵⁾

金武御殿ではウフタマウドウン（玉陵）のシルヒ

ラシを挟んで東をアガリヌタマウドウン（東の玉陵）、西をニシヌタマウドウン（西の玉陵）と呼んでいる。ヤマガーヌタマウドウン（山川の玉陵）は下記の山川陵を指すもので、尚久王が山川に葬られているという一般の誤解から「ニシヌタマウドウン」という呼称が定着したのではないか。山川にある陵墓を「ニシヌタマウドウン」と呼ぶようになったのは東恩納寛惇の見解が大きく影響しているようである。

なお、金武家の墓陵に南接して「ヤマガーヌタマウドウン（山川の玉陵）」と呼ばれる「山川陵」がある。『中山世譜』などで「山川崎御墓」と記される墓とされる。様々な話が伝わっているが、一説によれば尚真王の長子である尚維衡は、父の愛妾思戸金の奸計によって廃嫡され、死後は浦添城北のユードゥリ（極楽山）に葬られたが、思戸金の産んだ第四世の尚清王は異母兄尚維衡の生涯を不憫に思い、この墓



写真8 金武御殿の墓陵（左端が「本覚山碑」）



写真9 山川陵

陵を築き、極楽山から尚維衡の遺骨を移葬したとの伝聞もあるが、定かではない。『中山世譜』の記述をみると、妃の一次葬にも使用されたこともうかがわれる。現在は最後の琉球国王尚泰の七男で、ジーブヌミーウドウン（儀保の新御殿）とも称される尚時家が使用する墓所といわれる。

3 金武御殿の年中祭祀～ウマチー祭祀と盆行事を中心に～

首里や那覇の都市民俗については『那覇市史 那覇の民俗』に詳しく記述されているところもあるが、記述の濃淡も大きく、祭祀によっては通常祭祀が不明で、また現行祭祀との兼ね合いも十分に知ることができない。首里や那覇の旧士族層の社会生活や祭祀などは各々特徴や違いもあったと考えられ、その実態については解明されているとは言い難い。

ここでは金武御殿における現行の年中祭祀に焦点をあてながら、その様態を記述することを主眼としている。

金武御殿は戦後、尚家のウシーミー（御清明祭）を代理で務めていたことはよく知られている。明治期の廃藩後、中城御殿は玉陵の管理が必要となったことから、尚家の王族に近い家筋として金武御殿の金武小〔金武朝重〕を番屋に住み込む管理者に任命した。一家は戦時中、自ら同所を離れることなく使命を全うし全滅した。金武御殿やその関係者は戦前期から王家の祭祀を支え、再現継承しながらも、金武御殿自身の祭祀を実修継承するという二つの役割を果たしてきた。

現行祭祀は門中会の会長（金武朝秀）・事務局長（野村朝生）を中心に執り行っている。かつてはムンチュウカミンチュ（門中神人）として護得久御殿の分家である仲宗根家出身の知念栄子さんが務めていた。知念さんは旧第一高等女学校を卒業したインテリでありながら、カミゴト（神事）をしているということで噂にもなっていた。知念さんが亡くなった後は空席となっているが、現在は宮城県に婚出している若い女性が、祭祀の度に参加し、門中神人の修行をしている。

金武御殿の年中祭祀（いずれも旧暦）としては正月、ウンチャビ（春の彼岸祭）、御清明祭、五月十五日ウマチー、六月十五日ウマチー、六月カシ

チー、七月七日七夕、七月十三日～十五日盆、八月カシチー、ウンチャビ（秋の彼岸祭）、九月九日重陽（菊酒）、冬至、ムーチー、十二月ウグワンブトゥチ（御願解き）などが主な祭祀である。

本稿では2018年の6月と8月に参与観察を行い、部分的に聞き取り調査を行うことができた旧暦五月ウマチー（稲穂祭）と旧暦七月の盆行事前半について短報として報告しておきたい。

(1) ウマチー（旧暦五月十五日）

五月のウマチー祭祀は稲穂祭で、五穀豊穡を祈願する祭祀である。祭祀の祈願対象は神棚である。参与観察を行った2018年は旧暦五月十五日が新暦6月28日にあたり、参加者は午前の10時30分頃から集まっていた。午前10時頃には庭には日除けのテントが張られ、祠堂の中では事務局長や門中の関係者が供物の準備を進めていた。

祭壇の中央には高膳に稲穂を供え、その左側には盆に人参3本と茄子3本、モーウイ（うり）2本を盛り、右側には果物のバナナ一房、桃2個、蜜柑4個を盛って供える。その手前にはンパナグミ（御花米）、おし麦、緑豆、金時豆、小豆の五穀の穀類が配されている。これらはその時に入手できるものを用意しており、年によって若干内容が変わることがある。さらに盆には大盛りのンパナグミが準備され、神酒の泡盛を入れる徳利2本、お茶用の茶碗、赤ロウソク2本などが祭壇に配置されていた。また、波上宮から奉納された御神酒（一升瓶）3本が仏壇に、また神棚前の祭壇にも同神酒2本が供えられていた。

五月は稲穂の祭りであるため、極力稲穂を入手するように努めている。苦勞することも多いという。今年の稲穂は真嘉比地区が豊年祭用に稲を栽培していたので、その稲穂を確保することができた。六月の場合は穂に実が結んだものを供える。

奥の座敷ナカメーでは、婦人二人が金武御殿の家紋があらわれた小包にンパナグミを入れ、参集者に持たせる分を準備していた。約200袋準備するという。

祭礼は11時50分頃からスタートした。祭壇の前に門中神人修行中の女性が白衣装をまとい着座し、その後ろには門中会長ほか役員が着座した。また、

座敷の下手側には王府おもしろ継承者の安仁屋眞昭と県立芸術大大学院生の山内盛貴（山内盛彬の曾孫）の二名が座わる配置である。事務局長が式の進行を行なうとともに、祭壇のそばにいて祭祀の細かな作法や手順の段取りも事務局長が平行して執り行なっていた。

儀式が始まる前に室内の明かりを消してからスタートした。祭壇手前に置かれているお茶碗2個にそれぞれお茶を注ぎ、御神酒用の一升瓶から徳利2本に泡盛を満した。次に赤いろろうそくに火を灯し、寿帯香を取り出し六本二組+三本の十五本をセットにしたものを4組準備し、それぞれに火をつける。1セットは神人修行中の女性が祭壇の香炉に立て、残りの3セットは神棚の香炉三つにそれぞれ事務局長が立てる。

こうしてすべての準備が整うと、まずは安仁屋らによる王府オモロの「オーレーガナシ」と「ウシカキブシ」の二曲を斉唱した。琉球王国時代、いずれも五月の稲穂祭に際して首里城正殿前において唱われた五穀豊穰を祈念する内容のオモロである。約12分の時間である。参会者はその間手を合わせて祈願していた。終了後には門中の男性役員を中心に四拝礼の方式で祈願を行う。

これらが終了すると、次に首里キューナ保存会(那覇市指定無形民俗文化財)の皆さんによるキューナが斉唱された。「アガリユウ」と「ウリジングェーナ」である。5名の方々が白衣装を身に着けて庭先で斉唱を演じ、終了後は祀堂のナカメーの座敷に着座して一通りの儀式が終わる。12時20分頃には滞りなく終了した。

その後に門中関係者などの一般の拝みも行われた。その時間帯には30～40名の参拝者が集まっていた。宗家を拝みに来る人たちは金武御殿の門中の子孫やゆかりのある人たちが来ているが、必ずしも一門の人とは限らない。昔、金武家の先祖が薩摩や唐旅の時に離島出身で船頭をしていた関わりとか、御殿に奉公していた縁とか、あるいはまた与那原の材木屋の大工さんは戦後にこの祀堂を建てる時に多くの給料を頂いたからとか、“グウンアギ”(御恩上げ)として様々な縁やつながりで参拝している。副会長の金武朝宣によると、ウマチー祭祀では各地から金武御殿の宗家を拝みに来るが、なかにはその人

たちでさえどのような繋がりや拝みにくるのかわからないという人たちもいる。その場合はわかる範囲内で答えている。また、ユタなどに言われて拝みに来る人たちもいる。

現在、金武御殿のウマチー祭祀においては、王府



写真10 金武御殿ウマチーの案内表示



写真11 ウマチー祭祀の供物



写真12 高御膳の稲穂と五穀の穀類



写真13 寿帯香



写真16 金武御殿ウマチーの参拝者



写真14 王府オモロの斉唱



写真17 ウマチー祈願の様子



写真15 首里キューナの斉唱

オモロと首里キューナの斉唱が大きく目を惹いているが、これらは4年前から導入されたもので、戦前に執り行われていた儀礼内容をなるべく近い形に再現するように努めた試みでもある。

(2) 旧盆（旧暦七月十三日～十五日）

2018年の旧盆は8月23日～25日であった。旧盆のウンケー（お迎え）は旧十三日の夕刻に行われた。おじいさんの時代は羽織と袴の衣装で提灯をともして、お迎えの言葉を言って、ご先祖様を迎え入れていた。

事務局長が門口でロウソクに灯をともして、お迎えした。「本日は当主（金武朝秀）が国頭勤めでできないため、私が代わりに務めている」旨も報告して、「ウィリンシェービリ」（お入り下さい）と唱えつつお迎えする。

仏壇には写真に示されるように、仏壇の上段には果物のバナナ（赤紙札付き）、「クワーシウージ」、

みかん（3個）を二組対にしてお供えする。中段には「クシチー（コウガーン）」、花ぼうろ、赤饅頭をこれも二組対にしてお供えする。そして下段にはタカウジン（高御膳）にウサチ（和え物）やナカミ（中味の吸い物）、ウンケージュシー（お迎え雑炊）を盛ってお供えし、お皿にはウンケーダグ（お迎え団子）7個の二組と小梅干3個を供える。こうした料理は、現在、野村家ですべて準備してお供えしている。

さらに仏壇前には赤い布をかけた祭壇が設けられ、両側に赤紙札を付したメロン各1個（これは以前はスイカであった）を置き、手前には三つの位牌に対応して、お茶用の茶碗各二組の3セットと盃3個が並べられる。

「クワシウージ」は10本を三角形（4本・3本・2本・1本の4段）に組み合わせて、赤い紙で結んだものである。切る寸法も元は決まっていますが、一尺弱であるが、今はその半分程度の長さに揃えている。自分たちで切って製作している。

これらのお供えする数はそれぞれ3個や7個だったりしているが、本来はすべて15の数で揃えるのがしきたりという。「クワシウージ」も15本を5段（5本・4本・3本・2本・1本）に組み合わせて整えていた。

仏壇の香炉には寿帯香と竹心御香の両方を供えて、ウンケーの祈願をする。寿帯香が格式からすると竹心御香よりも上である。寿帯香と竹心御香の両方を供えているが、寿帯香が当主の分で、竹心御香も供えられるが、それは野村家の分という。御殿殿内では様々な場面でいわゆる「家格」が配慮され、祭祀の供物においても大きさや容器仕様などにも差を設けて入念に準備されている。

一般にはサトウキビを1m前後の長さに切って、仏壇の両側に立てた「グーサンウージ」が先祖の杖としてよく紹介されるが、金武御殿では先祖は駕籠に乗ってくるのでこれを供えることはないという。また、二番座の入口に水を入れた洗面器を置き、ご先祖様が足を洗うためのものという習俗もないという。

また、一般では施餓鬼供養のため供物の一部を小皿などに分けて仏壇の脇などに置かれるが、このような作法は同様に行う。ただ供物と同様に同じような重箱に入れてあげるようにするといい、格式を重

んじていることが伺える。

七月十四日のナカビ（中日）からはお供え物も豪勢で豊かになる。朝はアサガユ（朝お粥）であるが、昼食には、仏壇に「ミフィルマ（御昼食）ヌグリーグ」として冷そうめんである「シダイソーミン（枝垂れそうめん）」をお供えする。写真は伊是名殿内の野村家でのシダイソーミンである。別の呼称として「タチウトウシソーミン（滝落としそうめん）」ともいう。名称は写真のように枝垂れや滝が流れ落ちる様子を表現しており、暑い盆の時期に涼をさそう風流なお供え物といえる。

午後にはマドウヌムン（おやつ）グリーグとしてアマンチャシとウンケーダグをお供えする。「アマンチャシ」は一般に言う「アマガシ（甘粕）」のことであるが、金武御殿では「アマンチャシ」と呼



写真18 ウンケーの仏壇飾りと供物



写真19 供物のクワシウージ（上段中央）とクシチー（下段左端）

んでいる。

中日の夕飯にはミヌダル（豚ロースの薄切りを黒胡麻だれに漬けて蒸した料理）とスンカイ（筍羹：竹の子のあつもの）、それに白いご飯をお供えする。スンカイは今では名前は聞いたことがあるが、食べたことがないという人も多い。

こうした行事にお供えするものの書付が戦前にはあったが、残念ながら去る沖縄戦で失われたという。

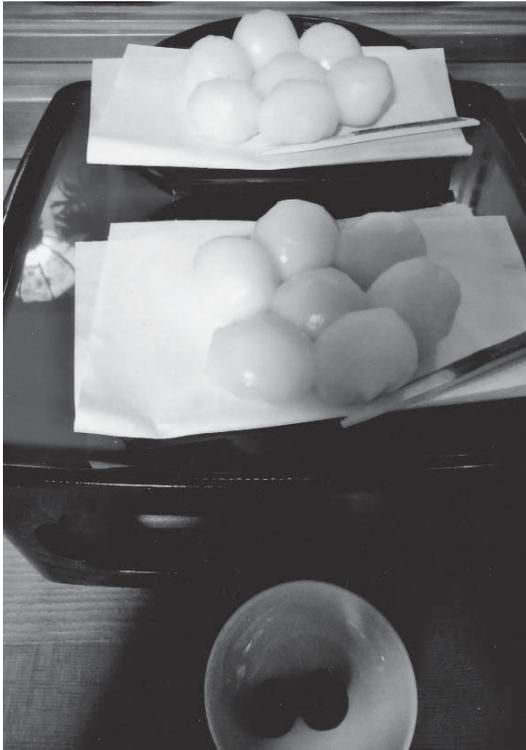


写真20 ウンケーダーグ（お迎え団子）



写真21 アマンチャシ



写真21 シダイソーミン

以上、六月ウマチーと旧盆の一部祭祀について記録・報告した。ウマチー祭祀は旧暦五月にもあること、また盆行事については十五日のワークイも含めすべてを観察記録できなかったことから、さらなる詳細は次号以降に継続して記録していく予定である。

【脚註】

- (1)源武雄「序説 首里・那覇の民俗」『那覇市史 民俗編』那覇市役所 1979年
- (2)宮田登『都市民俗論の課題』未来社 1982年 80～83頁
- (3)宮田登『「心なおし」はなぜ流行る』小学館1997年（初出：『都市と田舎』小学館 1985年）137頁
- (4)同上書 159頁
- (5)多和田真助『門中風土記』沖縄タイムス社 1986年 66～70頁
- (6)東恩納寛惇「向姓大宗金武家伝」『東恩納寛惇全集 10』第一書房 1979年 187頁
- (7)沖縄県氏姓家系大辞典編纂委員会『沖縄県氏姓家系大辞典』角川書店 1992年 446頁
- (8)伊波普猷・東恩納寛惇・横山重（編）「琉球国旧記」『琉球史料叢書 三』井上書房 1962年 80頁
- (9)脚註(6)前掲書 167頁
- (10)「如在」は『論語』八佾第三の十二「祭如在、祭神如神在。子曰、吾不興祭如不祭。」に由来する。「祭ること如在（いま）すがごとくす。神を祭るには神在すがごとくす。子曰く、吾祭祀に與らざれば、祭らざるがごとし。」

- (11) 沖縄県立博物館『沖縄県立博物館50年史』
1996年 57～59頁及び328頁
- (12) 前掲書「向姓大宗金武家伝」208～209頁
- (13) 山里純一『沖縄の魔除けとまじないーフーフダ
(符札)の研究ー』第一書房 1997年、同著『沖
縄のまじない 暮らしの中の魔除け、呪文、呪符
の民俗史』ボーダーインク 2017年他参照
- (14) 東恩納寛惇「南島風土記」『東恩納寛惇全集 7』
第一書房 1979年 209～210頁
- (15) 久手堅憲夫『首里の地名ーその由来と縁起ー』
第一書房 2000年 184～185頁